

公開気象講演会

「台風災害 ～台風列島でどう生き延びるのか?～」

日時: 2016年5月21日(土) (大会第4日) 13:30～17:00

場所: 国立オリンピック記念青少年総合センター

参加費: 無料 *事前登録が必要になります! <http://www.metsoc.jp/?p=5906>



1. 「歴史に残る台風と防災力の向上」

日本気象予報士会 大西晴夫



2. 「鬼怒川決壊をもたらした豪雨のしくみ」

気象研究所 津口裕茂



3. 「台風観測・予報のいま」

気象庁予報部予報課アジア太平洋気象防災センター 室井ちあし



4. 「みらいの台風予報」

理化学研究所計算科学研究機構 吉田龍二



5. 「気象情報から災害リスク情報へ」

京都大学防災研究所 竹見哲也



6. 「台風報道のいまとみらい」

お天気キャスター 南利幸

7. 「パネルディスカッション」

司会: 横浜国立大学 筆保弘徳

総合司会 気象研究所 小田真祐子

主催: (公社) 日本気象学会・教育と普及委員会

後援: (一社) 日本気象予報士会

問い合わせ先: 筆保弘徳 (教育と普及委員会)

E-mail: msj-ed_2016@metsoc.jp

講演会趣旨

日本気象学会2016年度春季大会の開催に併せて、一般市民の方々に気象に関する最近の研究成果や関心の深い事柄について解説することを目的として公開気象講演会を開催します。今回は、「台風災害」を取り上げます。我が国では、1959年の伊勢湾台風以降、台風観測網や防災整備そして予報技術の開発を国家政策として推し進めてきました。その結果、台風による災害は半世紀前と比べて大幅に減少しています。しかし、平成23年台風第12号により死者・行方不明者90名以上、昨年（平成24年）の台風第17号と第18号接近時では記録的な大雨により鬼怒川堤防は決壊と、今もなお甚大な被害は起き続けています。科学技術がこれだけ進展した現在においても、台風の脅威からのがれることはできないのでしょうか？そこで今回の講演会では、これまでの台風被害や現在の台風観測・予報をふりかえり、未来の台風予報や社会に伝える災害リスク情報、これからの報道や気象キャスターの使命について、一般の方々にも分かりやすく紹介します。ふるってご参加下さるようお願いいたします。この台風列島で、君は生き延びることができるか？



日本列島は世界でも有数の台風常襲地帯に位置しており、太古の昔から多くの台風の襲来に悩まされてきましたが、一方で、台風とうまく付き合う智慧を蓄えてきました。その歴史を振り返るとともに、1959年の伊勢湾台風をきっかけとした日本の「防災力」の向上を振り返ります。気象庁が発表する台風の進路予報の精度は目覚ましい改善が行われていますが、「防災力」の向上には「頭打ち傾向」が見られます。これについても考えてみましょう。（大西 晴夫）



2015年9月9日から11日にかけて、関東・東北地方を中心に記録的な豪雨が発生しました（平成27年9月関東・東北豪雨）。この豪雨により、関東地方では鬼怒川の堤防が決壊し、特に茨城県常総市では大規模な水害が発生しました。この豪雨は、複数の線状降水帯によって構成された南北にのびた帯状の降水システムによってもたらされました。帯状の降水システムの発生には、台風第17・18号の影響があったことがわかってきています。講演では、台風の影響だけでなく他の要因も含め、豪雨発生のしくみについて紹介します。（津口 裕茂）



台風はもっとも激しい大気現象の一つであり、防災上の観点からも極めて重要な気象観測・予測の対象です。洋上の直接的な観測は少ないものの、静止気象衛星を利用した解析技術をはじめ、様々な観測手法が活用され、位置や強度の解析精度は高まってきています。また数値予報技術の進歩に伴い、進路予報精度も向上してきました。講演では、気象庁における観測・解析と予報のあらましや最近の進展・課題を紹介します。（室井 ちあし）



台風は大災害の原因となる現象であるとともに、その構造やメカニズムが気象学的に興味深い現象です。観測や数値モデルによるシミュレーション、データ解析によって台風の研究が盛んに行われています。例えば、過去の台風発生環境を統計的に解析した結果をもとに予報モデルの結果を解析し、発生の可能性がある日時、場所を特定するための研究が行われています。私からは、こういった最先端の研究成果をご紹介します。将来の台風予報がどんな風に変わる可能性があるかお話ししたいと思います。（吉田 龍二）



甚大な気象災害が起こるにつれて、天気予報で耳にする気象情報もどんどん進化してきめ細かなものになっています。情報が多様化することで様々なニーズに応えている一方、情報が複雑化することで理解が追いつかないという一面もあるかと思っています。台風や豪雨による身近な災害に備えるためには、多様な気象情報を活かして、災害リスクとして実感することが大切です。どうすれば気象情報を災害リスク情報として活用できるのかについて考えたいと思います。（竹見 哲也）



私が仕事を始めた頃の台風情報は、台風的位置や予想進路、衛星や気象レーダー、アメダスによる実況値を用いて解説をしていました。最近、進路予想は5日先まで延び、GPVの降水や風の予測を画面に示すことができるようになりました。台風情報は「災害の発生する可能性が高い」ことを、いかに分かりやすく視覚に訴えるかが重要です。今後は台風接近時の状況を容易に想像できるような画面作りが求められるでしょう。（南 利幸）



主催：（公社）日本気象学会・教育と普及委員会
後援：（一社）日本気象予報士会

問い合わせ先：筆保弘徳（教育と普及委員会）
TEL:045-339-3346（横浜国立大学）
E-mail:msj-ed_2016@netsoc.jp